



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	地理学研究室を去るにあたって（小泉武栄先生を送る）(fulltext)
Author(s)	小泉,武栄
Citation	学芸地理(67): 17-19
Issue Date	2013-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2309/134156
Publisher	東京学芸大学地理学会
Rights	

地理学研究室を去るにあたって

小泉 武栄

この3月で東京学芸大学を退職する。地理学教室のスタッフとしておよそ20年を過ごし、その後、教養系の発足に伴って欧米研究教室を4年、環境教育教室を10年余り担当したが、最後にまた社会科の地理学分野に戻った。

私が東京学芸大学の地理学教室に助手として採用されたのは、1978年の4月、29歳のときである。以来35年、何回か他大学や研究所からの誘いもあったが、皆お断りしてしまい（そのため、何人かの方には大変なご迷惑をおかけしてしまったが）、結局はこの大学で定年を迎えることとなった。まことにありがたいことである。考えてみると、私は学部時代の母校であるこの大学が好きだったし、学生諸君の程度も含め、私には相性のいい大学だったと思う。また先輩、同僚にも恵まれ、充実したいい半生を過ごすことができた。関係者の皆様には感謝申し上げます。

よく退職の際、「お陰様で大過なく過ごすことができ、云々」と挨拶される方が多い。しかし私の場合は、6階の実験室の水漏れで階下の研究室の図書を全部ダメにしてしまったことを筆頭に大過だらけであった。入試問題などのミスは数しれない。まあミスの多いことや事務能力のなさについては、19世紀の博物学者が現代に蘇ったようなものだから大目に見てもらうしかないが、いろいろな方々に迷惑をおかけしたことは間違いない。

改めて見直してみると、私の半生は不時着しそうな低空飛行の連続だった。学部も大学院も

ほとんどビリで入ったし、助手の採用に当たっても反対が多く（私は大変評判が悪かったのです）、市川健夫先生がおられなかったら、多分採用されなかったはずである。助手になってからも事務仕事はさぼって論文ばかり書いていたので、歴代を通じて最悪の助手という称号をいただいている。

ただ地理学教室にはいくつか貢献したことがある。1つは助手になってすぐ、教室会議に提案して、大学院生のコピー代を1000枚までタダにしたこと。ついでに修士論文のコピーもタダにし、さらに若干の消耗品等も買えるようにした。当時、コピー代はひどく高かったので、大学院生はこれでかなり助かったはずである。先生方には「君は院生ではないんだぞ」、「ここは東大ではない」と怒鳴られたが、市川先生の助けを借りて何とか押し通した（院生の皆さん、少しは感謝してね）。

2つ目は自主ゼミを始めたことである。自主ゼミのない研究室など、現代の学生諸君には想像もつかないだろうが、私が学部生だった頃はなかったのである。私は隠れてゼミを始めたのだが、そのうち同じように始める先生が現れ、いつの間にか公認になった。

3つ目は、ゼミで多くの人材が育ってくれたことである。もともと社会科の学生諸君は、自然科学的な色彩の強い自然地理が嫌いなものである。したがって最初はだまして野外に連れ出し、自然の面白さを感じさせて、興味を持たせるしかない。しかしありがたいことに、講義や

ゼミを始めると、学年によっては5人も6人もだまされて来てくれる学生が現れた。総じて好奇心が強く、知的レベルが高いという共通性をもっており、優秀な学生が多かった。また変わり者も結構いたが、今回の私の退職に際しているいろいろやってくれた人たちの多くは、その頃、学生だった皆さんである。最近減ったが、ゼミには他大学の学生、院生も多く参加し、賑わっていた。現在は社会人がそれに替わっている。

環境教育専攻や他大学の学生を含め、学生諸君には卒業後もそのまま大学院に進む人が少なくなかった。中にはさらに他大学の博士課程に進み、博士号を取った人もいる。博士号の取得者は現在では14人くらいになっているはずである。ただ教員採用試験は、面接で余計なことを言うために落ちる学生が少なくなく、一時は血液型がO型で自然地理ゼミに入った学生は教員採用試験には受からない、とまで言われたほどである。しかしそういう学生も私学の高校などに採用されたりして優秀な教員や社会人になり、いつの間にかそういう噂は消えてしまった。

研究面の変遷については、最終講義で話した通りだが、40年余り、地生態学という分野をやってきた。ただテーマはかなり変化してきた。主要なテーマは以下の通り。

- ・高山帯の多彩な自然景観の成立要因 (大学院修士論文)
- ・高山の地質と植生分布の関わり (化学成分でなく岩屑の生産と移動を中心にして)
- ・永久凍土地域の植物群落 (大雪山, 黄河源流地域, 北極エルズミア島)
- ・三頭山における地形・地質と植生分布の関わり
- ・高山帯における風食に関する研究
- ・高山帯における斜面発達と植生遷移
- ・風化皮膜を用いた岩塊斜面の形成期
- ・多摩地域におけるカンアオイ類の分布とその

成立要因

- ・地すべりが原因になって生じた植物群落
- ・風食がもたらす高山植物群落の種の多様性
- ・縞枯れ現象の原因
- ・火山の植生分布と火山活動

このうち故鈴木由告氏と共同で行った三頭山の森林の調査以外は、全て私が野外の自然を見て思いついたテーマである。私には原始人の感覚が先祖返りして現れているのか、野外に出ると、山の自然のつながりや成り立ちが見えてしまうようなところがある。したがってテーマそのものが発見であり、当然のことながら先行研究はない (上にあげたテーマには世界で1本しかない論文がいくつかある)。だから苦労も多かったが、研究そのものは、新しい事実が次々に明らかになるわけだから実に面白かった。なおこのうちのいくつかは学生や大学院生のテーマになり、その何割かは学会誌に掲載された。ただ公表されないままになっているものも多いので、退職後に何とかしたいと思っている。

なぜそこにその植生があるのだろうか。これを地形・地質や自然史から説明するのが、地生態学だが、こういう分野はありそうに見えて、実はなかった。なぜ、という発想がなかったこと、あってもどう調べていいかわからない、ということが原因のようで、おかげで私はこの分野の開拓者のような役割を担うことになってしまった。

地生態学は研究できる人が少ないため、依然としてマイナーな分野だが、重要性は次第に理解されるようになってきている。たとえば環境省の会議で、ここはなぜ生物多様性が高いのか、という質問が出ることもある。これに対して答えるべき生態学者は、事実はそうだと指摘はできるが、解答は持ち合わせていない。そこで自然学者である私の出番ということになるわけである。そんな訳で、私は成り行き上、日本

から推薦する世界自然遺産候補地の選定委員と日本ジオパーク委員会の委員を委嘱され、現在に至っている。

遺憾なことに私は地理学の科学研究費というものを受けたことがない。30歳代から40歳代の一番充実していた時期に、20回申請して全て落ちた(以後は申請をやめた)。したがって野外での調査は全て自費で行っている。結構陳腐なテーマが通っていることから考えると、審査員には私のテーマが理解できなかったか、意味がわからなかったに違いない。私は地生態学が自然地理学の本来の形だと思っている。審査に当たった人たちには見る目がなかったことを恥じてもらいたい。

ついでながら、30代から40代にかけて、私は日本地理学会や日本第四紀学会のいろいろな役員を務めたし、後で述べる普及活動で地理ファンをかなり増やすなどして、学界にはかなり貢献したつもりである。しかし科研費が全然来ないことや、個人的な事情があって、50代以降は、役員はお断りすることにした。文句という人もいるが、事情を理解していただきたいと思う。

学位論文をまとめたのは44歳のときである。そのいきさつについては『日本の山はなぜ美しい』(古今書院)という本にまとめたので、興味ある方はご覧いただきたい。

学位論文執筆以降の私の行動は2つに分かれるようになった。1つは地生態学の研究の継続である。地生態学の視点から日本の山をみると、どの山にも新しいテーマが見つかる。それをじっくり調べれば、論文になるのだが、それをやっていると、調べることのできる山は限定されてしまう。それを避けるために、私はできるだけ多くの山に登り、「登山時報」という勤労者山岳連盟の機関誌に、この山の自然はこうなっていますよ、と6年余りにわたって毎月書

き続けた。全部で73回、扱った山は40くらいになるはずである。その半分をまとめて『自然を読み解く山歩き』(JTBパブリッシング)という本にした。

もう1つは、地生態学の普及活動である。学位論文執筆後すぐに岩波新書の執筆依頼があり、それまでの調査結果を『山の自然学』にまとめた。この本は幸い好評で、現在15刷りを数え15年ほどたった今でもまだ書店に並んでいる。そしてこの頃から、日本山岳会や朝日新聞社の森林文化協会などから講義や巡検の依頼が増え始めた。私はまだ若かったから、巡検の依頼はなるべく断らないようにし、社会人のグループを案内して山に登り、自然の素晴らしさを理解してもらうよう努めた。その後、この時のグループが母体になって、「山遊会」、「山の自然学クラブ」、「山の自然学研究会」などが誕生し、現在でも活動を続けている。また朝日カルチャーセンターや立川市民大学などでも、講義を始め、「山と溪谷」や「岳人」の連載も引き受けた。最近では雑誌地理に「観光地の自然学」を連載している。

退職後どうするか。おそらく2つの活動を継続しつつ、これまでの研究成果を本や論文にまとめることが中心になるだろう。いつまでも山に登り続けるということは無理だが、健康に注意してできるだけその期間を延ばしたいと思っている。

末筆ながら「学芸地理」の本特集号の編集・執筆に関わっていただいた方々、並びに長年おつき合いをいただいた東京学芸大学地理学会会員の皆様に心から感謝申し上げます。また私を支えてくださっている社会人の皆様方にも御礼を申し上げる次第である。ありがとうございました。